

平成30年6月27日現在

機関番号：32401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02175

研究課題名(和文) 英国地方都市における前衛美術運動—リーズ・アーツ・クラブの軌跡

研究課題名(英文) The Regional Avant-Garde Art Movement in England: A Study of the Leeds Arts Club

研究代表者

要 真理子 (KANAME, Mariko)

跡見学園女子大学・文学部・准教授

研究者番号：40420426

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本課題においては、これまで日本国内では詳細に紹介されることのなかった英国の前衛美術運動の一端を、特に「地方都市における前衛美術運動」としての性格が強いリーズ・アーツ・クラブ(the Leeds Arts Club, 1903-1923)の活動ならびに思想の独自性を明らかにするとともに、首都ロンドンではなく一地方都市が美術教育と芸術文化振興において大きな役割を果たすようになった経緯を確認し、その分析作業を通じて、日本での芸術による地域振興ならびに芸術思想・教育の拠点育成に寄与すべく必要条件を明確化した。

研究成果の概要(英文)：In England in the early 20th century, Leeds, a regional city located in the north of West Yorkshire, served as a hub for novel art movements based on local communities including a university, social groups, and so on. Consequently, Leeds came to be an artistic city rivalling London. This project has two aims: firstly, to examine why a local city could come to play a greater role in art than metropolitan cities at that time, with respect to the Leeds Arts Club; secondly, it aims to consider a potential ideal way to develop both new art and art in local areas in present-day Japan. To these ends, the study will apply knowledge gained from a discussion of two workshops held in Tokyo and Kyoto during 2017-18. As result, the study will produce recommendations for promoting regional development through art and for creating a hub of art and education in Japan.

研究分野：美学・芸術学

キーワード：英国 日本 地方都市 前衛美術運動 the Leeds Arts Club 文化政策 国際交流 地域交流

1. 研究開始当初の背景

英国の地方都市リーズは、しばしばロンドン、マンチェスター、バーミンガムに次ぐ英国第四の都市と言われており、都市圏の規模としては首都ロンドンの約18% (人口比)あるいは約28% (面積比)程度に過ぎない。しかし、リーズ美術学校は、抽象彫刻を国際的に牽引したHenry MooreやBarbara Hepworth、またターナー賞を受賞した現代美術の代表的人物であるDamien Hirstらを輩出し、またリーズ大学の歴代の美術史教授陣には、古くはHerbert Read、Quentin Bell、現在はGriselda Pollockという錚々たるメンバーが名前を連ねている。もともとリーズ市を含むウエスト・ヨークシャー地方には、1893年にブラッドフォード市で独立労働党 (ILP) が結成されたこともあり、革新的な政治理念と先進的な美術実践が共存する土壌が用意されていた。実際、Readの伝記を書いたDavid Thistlewoodの記述通り、「リーズはロンドンに次ぐ英国前衛美術運動の中心」(Herbert Read, Routledge Kegan & Paul, 1984)として認められている。

研究代表者の要真理子と研究分担者である前田茂は、平成24年度から26年度にかけて実施した日本学術振興会科学研究費補助金 (以下、「科研費」と略) 基盤研究 (C) 採択研究課題「英国における児童美術教育の成立と自然観の変容」に従事する中で、英国の美術教育とモダンアートに大きな影響を及ぼした人物の一人としてリーズ大学副総長であったMichael Sadlerに注目することとなった。美術教育学者であったSadlerは、1910年代を通じてリーズ市美術館の学芸員として同時代の英国モダンアートを牽引した美術批評家Frank Rutterとともに、リーズ・アーツ・クラブを主導し、先に紹介したようなリーズの地位を築いたと言える。

多くの研究が検証しているように、英国の19世紀末から20世紀初頭は、首都ロンドンでアーツ&クラフツ運動に触発された知識人たちによる社会改革運動が興り、そこから貧困層に対して職工教育と職住近接環境を提供するトインビー・ホールに代表されるセツルメント運動が開始され、その対象を中流層にも拡張することによって田園都市の構想へと展開していった時期である (藤田・要他共著、『近代工芸運動とデザイン史』、思文閣出版、2008、藤田・要共編著『倉敷2005「芸術と福祉」国際会議論集』、大阪大学大学院美学研究室、2005)。こうした時期、リーズ・アーツ・クラブは、ILPやフェビアン協会などの革新思想に啓発された学校教師Alfred Orageと文芸評論家Holbrook Jacksonによって1903年に始動した。文字通り地方都市リーズを拠点とした文化運動であり、初期にはギルド社会主義の影響を受けていたが (Tom Steele, *Alfred Orage and The Leeds Arts Club*, Scholar Press, 1990)、やがて先述のSadlerとRutterが中心人物となるこ

とで同時代美術との結びつきをいっそう強めていった。

これまで、20世紀英国モダンアートへの大陸からの影響は、主にフランス・ポスト印象派を紹介したRoger Fryとブルームズベリー・グループを通じてのもの、とりわけ1910年にロンドンで開催された第1回ポスト印象派展が大きく取り上げられてきた。その一方で、リーズ・アーツ・クラブは、1913年の展覧会において、ポスト印象派だけでなく、W. Kandinskyをはじめとするドイツの20世紀初頭美術を英国に紹介し、その造形理念について上述のFryと同レベルの高い理解を示していたとされている (Thistlewood, *op.cit.*)。こうしたドイツのモダンアートへの関心は、1908年に、後にT. E. HulmeやE. Poundらロンドンの知識人たちとの交流にも発展し、英国の前衛美術運動として唯一とも言われるヴォーティシズムを世に送り出した雑誌『the New Age』の創刊を見るに至る。

上記のRoger Fryとブルームズベリー・グループ、ならびにヴォーティシズムが英国モダンアートの展開において果たした重要な役割については、研究代表者が財団法人鹿島美術財団「美術に関する調査研究」助成採択研究課題「ウィンダム・ルイス (1882-1957) のヴォーティシズム 英国モダニズム美術の展開」(平成19年度)や、科研費基盤研究 (C) 採択研究課題「英国モダニズム美術の形成と展開に関する総合的研究」(平成21年度~23年度)を通じて、また研究分担者も科研費基盤研究 (C) 採択研究課題「イギリス・モダニズム美学の再考 二〇世紀初頭の映画芸術への展開を追って」(平成23年度~25年度)を通じて注目してきたが、その研究調査の過程において浮上してきた「地方都市における前衛美術運動」に焦点を当てることによって、これまでとは異なる地方文化行政の観点も含めながら、英国モダンアートの展開に関する体系的な研究をさらに推進し、同時にその成果として、現在の日本の文化行政にも一定の指針を与えることのできる提言にまとめられるという見通しを持った。

2. 研究の目的

本研究においては、これまで日本国内では詳細に紹介されることのなかった英国の前衛美術運動の一端を、特に「地方都市における前衛美術運動」としての性格が強いリーズ・アーツ・クラブ (the Leeds Arts Club, 1903-1923) に焦点を当てながら、その活動ならびに思想の独自性を明らかにすることを目的とした。同時に、この運動と地方都市リーズとの関係を、政治学、文化行政学、教育学の側面も含めつつ分析し、首都ロンドンではなく一地方都市が美術教育と芸術文化

振興において大きな役割を果たすようになった経緯を解明し、この研究の成果を踏まえつつ、最終的には、日本での芸術による地域振興ならびに芸術思想・教育の拠点育成に寄与することを目指すものである。

3. 研究の方法

本研究には、研究代表者（要）と研究分担者（前田）の二名が従事し、これに日本国内研究協力者として加藤隆司、英国の研究協力者として Paul Edwards、Layla Bloom（初年度のみ）の三名が参加、途中から先行研究者 Tom Steele、リーズ市美術館 Nigel Walsh、ヘンリー・ムーア研究所 Jon Wood が加わった。

調査すべき範囲を、1) Holbrook Jackson と Alfred Orage がリーズにおいて主導的役割を演じた 1911 年まで、2) Michael Sadler と Frank Rutter が主導的役割を演じた 1911 年以降、3) 上記の時期を通じて方向付けられたリーズ市の文化行政が発展する 1920 年代以降、の三つの時期に大別した上で、1) 思想史、2) この思想の実践としての美術運動史、3) この美術運動を支援すると同時にこの美術運動から影響を受けた文化行政史、という三つの側面から、それぞれの時期における大陸ならびに他の英国主要都市の同時代の美術動向との関係、リーズ市政・市民との連携などを、人的交流に関するアーカイヴズ資料や当時の行政文書をもとに調査した。

主として 1) 1911 年以前の思想基盤の形成期を研究分担者の前田が、2) 1911 年以降の前衛美術運動への展開を研究代表者の要が担当し、3) 1920 年代以降の動向は共同で取り組んだ。

(1) 平成 27 年度においては、国内、および先行研究文献からリストアップした海外の文献・資料を、リーズ市を拠点として収集した。具体的には以下の通り。

研究代表者と分担者は、夏期に、リーズ大学ならびにリーズ市図書館等において資料調査を共同で行った。リーズ市内、ヨークシャー地方の新聞・雑誌を中心に該当年代の関連記事を収集した。8 月に、リーズ大学スタンレイ & オードリー・バートン美術館で、Layla Bloom と研究内容に関して意見交換を行うとともに、さらなる協力者として、英国の先行研究者で、『Alfred Orage and The Leeds Arts Club』の著者 Tom Steele を紹介してもらい、リーズ大学で、彼の著作と本研究の方向性について Steele から有益な示唆を得た。

冬期には、研究代表者がパリで調査中の分担者を訪問した後、ロンドンの英国図書館、ロンドン大学教育研究所（Institute of Education）で資料調査・複写を行った。

(2) 平成 28 年度も引き続き、研究対象となる

リーズをはじめとする英国の研究機関ならびに公共図書館等で資料調査・収集を行った。具体的には以下の通り

研究代表者と分担者は、夏期に、リーズ市図書館、リーズ大学図書館、バーミンガム市大学アーカイヴ、オクスフォード大学図書館、英国図書館、ヴィクトリア&アルバート美術館・ナショナル・アート・ライブラリー、コートールド研究所附属図書館において、リーズの前衛芸術を推進した人物の一人フランク・ラターの業績をたどるため、20 世紀初頭のリーズ・アーツ・クラブおよびリーズ市美術館で開催された展覧会資料を調査した。

同じく夏期に、研究代表者と分担者は、文化政策の観点から、リーズ市/ヨークシャー州と大学ないし美術館がどのように連携しているかを考察するため、20 世紀初頭のリーズ市図書館 & 美術館が刊行した年次報告書を閲覧・複写した。9 月、豊中市役所を訪問し、上述の通り、連携研究者加藤隆司氏に中間報告を行い、とりわけ地方行政・芸術文化政策の観点から同氏の助言を得た。冬期には、これまでに収集した資料を整理し、研究代表者と分担者は共同で論文「地方都市における前衛美術運動の事例検討 “リーズ・アーツ・クラブ” の所産」を執筆した。

研究協力者の一人 Layla Bloom が産休のため、実質的な協力がかなわなくなったこと、インタビューを予定していた Benedict Read (Herbert Read の子息) が実施直前に亡くなったことにより、当初の計画を変更、国内関係者のみの公開研究会を開催することとした。

(3) 最終年度は、前年度までに明らかとなった一次資料の海外所蔵機関を訪問すると同時に、ケンブリッジ大学およびリーズ市内で現地の研究協力者と打合せを行った。国内では成果報告の一環として公開研究会を企画し、11 月と 2 月、二回実施した。具体的には以下の通り

研究代表者と分担者は、夏期にマンチェスターの帝国戦争博物館で開催された Wyndham Lewis の回顧展を見学し、そのカタログ序文を執筆した Paul Edwards より Henry Moore Institute の所長 Jon Wood を紹介された。その一方で、ブラッドフォードとリーズ、二箇所の産業博物館を訪問した。

研究代表者と分担者は、冬期に地方美術館運営に関わる資料を追加調査しつつ、ケンブリッジでは Paul Edwards と、リーズでは Jon Wood、さらには Nigel Walsh と会合し、研究の助言を得るとともに、本課題終了以降の研究協力の継続を確認した。

11月と2月に企画・実施した公開研究会の詳細は、研究成果の項目で述べる。

4. 研究成果

- (1) 平成27年度夏の調査で、研究協力者の学芸員 Layla Bloom より紹介された先行研究者 Tom Steele と会い、自著の解説をはじめ、数少ない関連文献に関して所蔵先等の助言を得た。
- (2) 平成29年度冬の調査で、研究協力者の Paul Edwards より紹介されたリーズ市美術館 Nigel Walsh とヘンリー・ムーア研究所所長 Jon Wood とリーズ・アーツ・クラブおよびリーズ市美術館、美術基金に関わる歴代の学芸員と希少な関連資料について助言を得た。両者から国際シンポジウム等の可能性を視野に入れた研究協力を打診され、本課題終了後となるが、現在計画が進行中である。
- (3) 平成29年5月に、代表者・分担者の共編著『西洋児童美術教育の思想』を出版した。本著は、本課題の前身となった科研課題（課題番号：23520135）の成果報告としてばかりでなく、また本課題の研究対象、地方都市リーズに国家の介入によっていち早くデザイン学校が整備されたこと、リーズ出身の Herbert Read の美術教育業績や人的関係など研究の要諦につながる情報を解題の執筆や翻訳作業を通じて確認することができた。
- (4) 平成29年11月5日に東京新丸ビル「京都アカデミアフォーラム」大会議室で、第一回公開研究会「新しい芸術はどのようにして地域から生まれるのか」を主催した。公開研究会の目的は、リーズ・アーツ・クラブの取り組みを一つの成功例としつつ、現代日本の取り組みも合わせて、地域とアートとの関係を検討しようとするものであり、第一回では、台東区と豊中市のアート・プロジェクトに関する報告の後で、そうした地域の状況を文化行政という観点から参加者全員で議論した。当日の登壇者は代表者・分担者に加え、研究協力者の加藤隆司、台東区文化産業観光部文化振興課長（当時）の内田円。参加者は研究代表者・分担者も含めて18名。
- (5) 平成30年2月8日にキャンパスプラザ京都第3会議室で第二回公開研究会（同上）を主催した。第二回では、第一回研究会での議論を継承しつつも、地域を超えた芸術文化の課題について、教育・観光・福祉という観点から、地域を超えた芸術文化の諸相について考察を深め、「地域」が孕む問題を検証した。基調報告および三つの発表の後で、登壇者からの問題提起を中心とした参加者全員による討論となった。そこから「地域が身近なものである」という「常識」が覆された。当日の登壇者は代表者と分担者に加え、京都

- 造形芸術大学教授上村博、跡見学園女子大学教授須藤廣、アトリエインカーブ・クリエイティブディレクター今中博之。参加者は研究者・分担者も含めて15名。
- (6) 跡見学園女子大学『コミュニケーション文化』第14号（リーズ・アーツ・クラブの歴史的意義および活動軌跡の考察）、『文学部紀要』第53号（前衛美術や芸術家を輩出するリーズ市の地盤形成に関する考察）、『マネジメント学部紀要』第26号（本課題公開研究会における議論の集約）に本課題の中間報告として研究代表者・分担者による共著論文を3篇投稿し、掲載された。
 - (7) 関連資料の読解や研究者や研究協力者との議論を通じて、新しい芸術を生み出す要件の一つとして同地域における同時代のメディアの役割に注目することとなった。そこで、研究題目「20世紀初頭の英国前衛美術と印刷メディアの発展」を2017年度DNP文化振興財団による「グラフィック文化に関する学術研究助成」に応募し、採択された。この研究は、本科研調査で明らかとなった、20世紀初頭のリーズ周辺地域が印刷業を主たる産業としていたことから、新聞・雑誌の刊行のみならず、卓越したカラー印刷技術によって革新的な思想の普及を後押ししていたという事実を出発点とする。本テーマに関しては、平成30年10月29日に国際デザイン学・デザイン史会議（バルセロナ大学）で英語による口頭発表を行うことが確定している。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 14件）

Mariko Kaname, The Development of the British Avant-Garde and Print Media in the Early 20th Century: In Reference to Vorticism, *Proceedings of The 11th Conference of the International Committee for Design History & Design Studies*, 査読有, 2018, 編集集中

要真理子, 新しい芸術はどのようにして地域から生まれるのか? : リーズと日本の事例検討、跡見学園女子大学マネジメント学部紀要、査読有、第26号、2018、印刷中

Mariko Kaname, The Modernist Landscape of Waves and Wars in Britain: A Comparison Between Vorticist Works and Korin's Screens, *Aesthetics (国際版美学)*, 査読有, No.22, 2018, 編集集中

要真理子・前田茂, 地方都市リーズの「雰

困気」の醸成 革新的社会運動から前衛美術運動へ、跡見学園女子大学文学部紀要、査読有、第 53 号、2018、21 - 34

要真理子・前田茂、地方都市における前衛美術運動の事例検討 “リーズ・アーツ・クラブ”の所産、跡見学園女子大学『コミュニケーション文化』、査読無、第 14 号、2017、56 - 65

要真理子・前田茂、映像による美的コミュニケーション教育、大阪大学大学院文学研究科美学研究室紀要『美学研究』、査読無、第 10 号、2017、124 - 136

要真理子・前田茂、日本のデザイン様式考 その相反する側面に関する現象学的分析、大阪大学大学院文学研究科美学研究室紀要『美学研究』、査読無、第 11 号、2017、85 - 97

Mariko Kaname & Shigeru Maeda, The Difficulty of Bridging between Art Education and Design Education for Children: A Reception of Marion Richardson in Japan After WW2, *Proceedings of The 10th Conference of the International Committee for Design History & Design Studies*, 査読有, 2016, 77 - 81

前田茂、自らのことを語りはじめたシェヘラザード、エコ美学&科学国際研究センター編『特集 テロリズム時代のアートと美学の役割』、査読無、2016、85 - 97

要真理子、モダニズムの地平 ブルームズベリーのエクリチュール、フィルカル：分析哲学と文化をつなぐ：philosophy & culture、査読有、第 2 号、2016、46 - 70

要真理子・前田茂、ヴァージニア・ウルフと映画表現における『時間感覚』の発見、大阪大学大学院文学研究科美学研究室紀要『美学研究』、査読有、第 9 号、2016、1 - 25

要真理子、児童造形教育における“pattern”の重要性：マリオン・リチャードソンの実践、跡見学園女子大学文学部紀要、査読有、第 51 号、2016、15 - 18 <https://ci.nii.ac.jp/els/contents110010051395.pdf?id=ART0010620529>

Mariko Kaname, Teaching Design to Children: The Meaning of Richardson's "Pattern-making", *The Journal of the*

Asian Conference of Design History and Theory, 査読有, No.1, 2016, 55 - 62, http://acdht.com/archive/2015/download/The_Journal_of_the_Asian_Conference_of_Design_History_and_Theory_No1_2016.pdf

Mariko Kaname, Bloomsbury's Vision: Considering "The Cinema (1926)" by Virginia Woolf, *practising aesthetics*, 査読有, Vol.3, 2015, 129-138

〔学会発表〕（計 8 件）

Mariko Kaname, The Development of the British Avant-Garde and Print Media in the Early 20th Century: In Reference to Vorticism, ICDHS2018Barcelona: The 11th International Conference on Design History and Studies(国際学会), 2018

要真理子、エベニーザー・クックのデザイン教育 外なる自然から子どもの内なる自然へ、意匠学会、2017

要真理子、西洋児童美術教育の思想 ドローイングは感性と創造性を育むか？、日本美術教育学会、2017

Mariko Kaname & Shigeru Maeda, The Difficulty of Bridging between Art Education and Design Education for Children: A Reception of Marion Richardson in Japan After WW2, ICDHS2016Taipei: The 10th International Conference on Design History and Studies (国際学会), 2016

要真理子、マリオン・リチャードソンの《パターン》概念 美術教育とデザイン教育の架橋、美学会、2016

前田茂、「ツンデレ」は属性なのか ツンデレ・キャラクターの文学的機能、同志社大学人文科学研究所第 16 回研究発表会（招待講演）、2016

前田茂、シュリンゲンジーフの舞台アクション《アッタ アッタ アート が脱獄している》（2003 年）をめぐって、美学会（招待講演）、2016

Mariko Kaname, Teaching Design to Children: the meaning of Richardson's "patterning", *Asian Conference of Design History and Theory*, ACDHT2015OSAKA (国際学会), 2015

〔図書〕（計 2 件）

岡林洋・清瀬みさを編、前田茂・シャン

タル・ジャケ・岩崎陽子・池田まこと・大愛崇晴・田之頭一知・村上真樹・高藤大樹・船木理悠・外山悠・竹中悠美共著、晃洋書房、カルチャー・ミックス 2 「文化交換」の美学応用編（同志社大学人文科学研究所研究叢書）、2018、78 - 164

要真理子・前田茂編著、東信堂、西洋児童美術教育の思想：ドロ잉は豊かな感性と創造性を育むか、2017、420

6. 研究組織

(1) 研究代表者

要 真理子 (KANAME, Mariko)
跡見学園女子大学・文学部・准教授
研究者番号：4 0 4 2 0 4 2 6

(2) 研究分担者

前田 茂 (MAEDA, Shigeru)
京都精華大学・人文学部・教授
研究者番号：8 0 3 6 8 0 4 2

(4) 研究協力者

加藤 隆司 (KATO, Takashi)
豊中市役所・都市活力部魅力創造課・主査

ポール・エドワーズ (EDWARDS, Paul)
ウィンダム・ルイス記念財団・理事

ライラ・ブルーム (BLOOM, Layla)
リーズ大学スタンレイ&オードリー・パー
トン美術館・学芸員

トム・スティール (STEELE, Tom)
グラスゴー大学・上級研究員

ジョン・ウッド (WOOD, Jon)
ヘンリー・ムーア研究所・所長

ナイジェル・ウォルシュ (WALSH, Nigel)
リーズ市美術館・主任学芸員